

生徒の笑顔と言葉で「学校」と「保護者」をつなぐ写真連絡帳

— 写真をもとにした穴埋め作文による「すごいねの循環」を生む授業実践 —

山口県立宇部総合支援学校 教諭 北川 正史

キーワード：家庭との連携、作文、iPad、Excel、知的障害

実践の概要

伝えることが苦手な生徒たちが、学びの成果を自分の言葉で伝えることができるようになることをねらいとした。そのために、書く力・読む力を育むことができること、ICTを活用した自立課題として取り組むことができることを念頭において教材を作成した。

1. 目的・目標

学校教育活動を進めていく中で、最も重要なことの1つは『学校』『生徒』『保護者』が互いに信頼し合うことである。その中で保護者との信頼関係は、3つのキーワード『〇〇ができたよ』『□□がわかったよ』『今日も楽しかったよ』が生徒たちから保護者へと発せられたとき生まれると考える。帰宅し笑顔でこのような言葉が出ることは、保護者にとって何よりうれしい瞬間でもある。そこで、知的障害があり、記憶を辿り伝えることが苦手な生徒が、写真を手掛かりにしてそれを伝える。このことにより「すごいねの循環」を生み、意欲的な学びから「伝え合う力」、「読み書き等の国語力」を育てていくことを目的とし、さらにそれをもとに、保護者との信頼関係を深めていくことを目指して、本実践に取り組んだ。

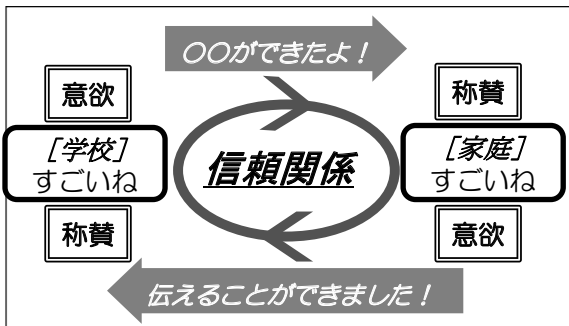


図1 すごいねの循環モデル

2. 実践内容

2.1 写真連絡帳について

下記のような教材を Microsoft Excel (以下 Excel) を使用して作成した。写真の選択から印刷まで、ボタン操作のみで行うことができ、所要時間は記入時間を含めて5分程度である。

表1 学習手順表

手順1 (写真の選択)	手順2 (文章の入力)
<p>スタート 1、写真をえらびましょう。</p> <p>ボタンで選択</p>	<p>文章を入力する。ボタン入力、記述を選択できる。</p>
<p>1日の活動の写真から1枚を選ぶ。</p>	<p>文章を作成する。ボタン入力、記述を選択できる。</p>
手順3 (印刷・記入)	完成例 (1週間分)
<p>印刷</p> <p>ボタン入力</p> <p>筆記スペース</p> <p>内容を確認して印刷する。日付等を記入する。</p>	<p>同じ用紙に追加していき、5日分印刷できる。</p>

2.2 ICT活用の目的とねらい

(1) その日の振り返りがスムーズにできること

記憶を辿ることが苦手な生徒にとって視覚情報は不可欠である。それを踏まえ、画像をわかりやすく表示すること、かつ選択できることを可能とするためICTを活用した。

【本時の学習内容】	学習活動	生徒の個性等	指導上の留意点
<p>●指導目標／学校生活の中で、印象的な事柄の写真を選択し、適切に内容を振り返ることができる。</p> <p>●評価／</p> <p>①写真の内容と入力・記載内容が一致しているか。</p> <p>②記述への意欲が見られたか。</p> <p>③正しい単語の筆記、漢字の使用ができたか。</p> <p>【指導略案】</p> <p>●単元指導計画（2年次通年での指導）</p> <p>(1)ステップ1：教師の支援のもとに学習しよう</p> <p>(2)ステップ2：ボタンを使用して一人でやってみよう</p> <p>(3)ステップ3：自立課題としてやってみよう</p> <p>(4)ステップ4：書く活動にチャレンジしてみよう【現在】</p> <p>(5)ステップ5：気持ちや思いを表現してみよう</p> <p>●本時の目標と展開（日常生活の指導 毎日6校時 生徒数3名）</p> <p>一日の日課として、教師の支援なく主体的な活動として取り組むことができる。</p> <p>(文字の筆記に関する支援は積極的に求めることを推奨している)</p>	<p>①3枚の写真の中から1枚を選択する。</p>	<p>生徒A</p> <p>○聞き取り及び発音が苦手である。</p> <p>○文字学習への意欲は高い。</p>	<p>○集中して学習できるように順番は最後にする。</p> <p>○積極的に漢字の読み・書き支援を行う。</p>
	<p>②写真の内容について、ボタンでの入力あるいは記述をする。(選択は生徒の自由)</p>	<p>生徒B</p> <p>○一人での机上学習に意欲的である。</p> <p>○変更は苦手である。</p>	<p>○学習中の言葉かけはしない。</p> <p>○文字等の訂正は、黒板等への筆記のみとする。</p>
	<p>③読んで内容を確認し、連絡帳に綴じる。</p>	<p>生徒C</p> <p>○記憶することが苦手である。</p> <p>○筆記活動には嫌悪感を持っている。</p>	<p>○本人が好んでいる活動の写真を中心に配置する。</p> <p>○筆記の訂正は、なるべくしないようにする。</p>

(2) 主体的な学習活動の成果として、家庭へ持ち帰ることができること

学びの成果を実感でき、家庭へと記憶をつなぐことができるようにするためにも、生徒が主体的に活動できるものとならなければならないと考えた。そのため、複雑な操作を覚えることや、記述することが苦手な生徒も、主体的にできるように、ICTを活用してボタンで全ての操作ができるものにした。

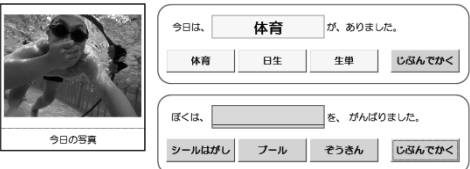
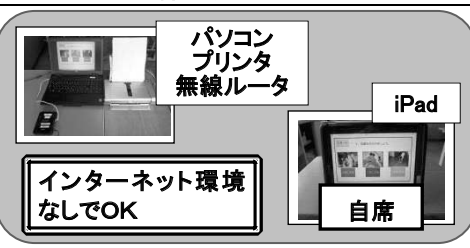
(3) 教師が準備に時間を要しないこと

本実践において一番重要なことは毎日継続することである。そのためには、準備に手間がかからないことが重要になる。そこでICTを活用して、①「写真を3枚フォルダに入れる（ファイル名を001～003に変える）」、②「ボタンに表示される文字を入力する」この2つの手順で、3分未満で準備可能なものにした。

2.3 実践の特長・工夫

本実践の特長・工夫は、次のとおりである。

表2 学習手順表

(1)穴埋め作文とし、ボタンでの入力、筆記を選択できる。	
	今日は、 <input type="text" value="体育"/> が、ありました。 <input type="button" value="体育"/> <input type="button" value="日生"/> <input type="button" value="生単"/> <input type="button" value="じぶんでかく"/> ぼくは、 <input type="text" value="がんばりました"/> を、がんばりました。 <input type="button" value="スクールはがし"/> <input type="button" value="プール"/> <input type="button" value="そうきん"/> <input type="button" value="じぶんでかく"/>
<p>作文の際に入力方法を選択できるようにした。それにより、スムーズに自立課題として取り組むことができるようになった他、書く活動にもチャレンジできるようにした。*保護者からの要望もあり、意図的に漢字での表記を多く取り入れている。</p>	
(2) iPad でパソコンを操作する。	
	インターネット環境なしでOK 自席
<p>リモートデスクトップアプリ (Splashtop2) を使用して、iPad でパソコンを操作できるようにした。それにより、①マウス操作が苦手な生徒でもタッチ操作で学習できる。②自席で落ち着いて学習することができる。このように、ハード (身体)、ソフト (心) 両面への配慮をした。</p>	
(3)発達段階に合わせて柔軟な対応が可能である。	
<p>現時点では、教科や内容についての穴埋め作文になっているが、Excel で作成しているのので、穴埋め箇所を主語や感想等の箇所に変化させたり、ボタンを消去して全文をキーボードにより入力する形にしたりすること等が容易にでき、生徒の発達段階に応じてきめ細やかな対応が可能である。</p>	

3. 成果

3.1 自立課題として完成

毎日の日課として定着し、入力から筆記まで教師の支援なしで、できるようになった。また、曜日の記述を通してカレンダーの読み方、日付と曜日の意識が定着した。



写真1 学習のようす

3.2 書く力・意識の向上

書くことを苦手としている生徒も、楽しい出来事があった日は、漢字での記述に挑戦する等、意識の向上が見られた。また、記憶を辿り、出かけた店名を懸命に欄外に書いている姿はとても印象的であった。

3.3 家庭との信頼関係の構築

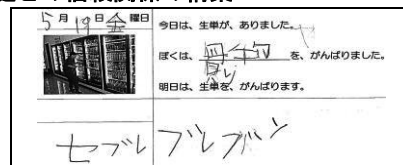


写真2 印象的な記載例

①生徒を通して学校での様子や成果が伝わること

②保護者との連携による「すごいねの循環」の完成

これら2点を通して家庭との信頼関係の構築を目指した。連絡帳に書かれた保護者からのコメント (写真3) を見ると、学校での様子や学習の成果は生徒を通して確実に伝わっており、その「伝えること」ができたことを家庭から担任に報告してくださることで「すごいねの循環」が起きていることがわかる。また、連絡帳等への関心が少なかった父親も連絡帳を見てくださるようになり、このことから、家庭との信頼関係の構築について一定の成果があったと考えられる。

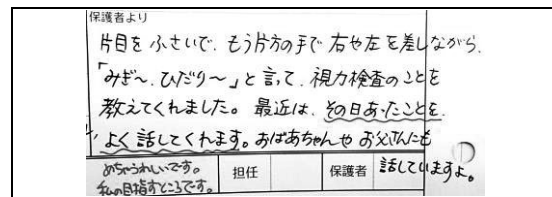


写真3 保護者からのコメント

4. 今後に向けて

今後は、聴覚障害や記憶が苦手な生徒がよりスムーズな生活を送るためにも、書く力 (入力) の向上を目指して、さらに充実した授業を展開し「じぶんでかく」へと導いていきたい。次に、感想等を入力できるように改良し、気持ちを表現できる力を育めるようにしたい。さらに、将来的にはスマートフォン等のカメラ機能を活用し、記憶の保持やスケジュール管理、自己を表現できるツールとして活用できるよう、自身でカメラを操作する場面も設定していきたい。そして、このような取組と同時に、進級や進学先へスムーズに移行できるシステムづくりにも取り組んでいきたい。